

古賀裕章氏の博士論文「The Inverse and Related Voice Constructions in Japanese: From a Functional-Typological Perspective」の審査結果について以下に報告する。

本論文は、直示移動動詞「くる」のヴォイスに関連する用法を、機能的に類似する受動構文、受益構文との体系的比較を通じて明らかにし、日本語のヴォイス体系に位置づけることを目的として書かれたものである。そして「くる」のもつ、話者の方向への物理的移動を表す機能と、時間にかかわる起動アスペクトの機能、そしてヴォイスに関連する機能との間に概念的平衡性が存在することを主張し、その拡張のメカニズムを提案している。

本論文は7章からなる。第1章では、北米アルゴンキン諸語に典型的に見られる「逆行態 (inverse voice)」を概観したうえで、1人称>2人称>3人称という人称に基づいた階層によって節の構造が選択されることを示した。Shibatani (2003)による、日本語においては階層の下位に位置する参与者から上位に位置する参与者に向けて移動事象が起きたときに「へてくる」が使われるという指摘を取り上げた上で、第2章以降で取り上げる問題の提起を行っている。

第2章では、日本語の逆行標識をライセンスするための意味的、統語的、語用論的条件を検討した。Shibatani (2003)の分析では、人称の階層に逆行する作用が起きたとき、それが移動であれば「へてくる」による逆行構文、行為であれば受動構文が選択されるとしている。しかし、このような主張には反例が見出され、「(私が) 太郎に鍵を渡された」のように移動を表す動詞が受動態に生じることもあるし、「太郎が (私を) 殴ってきた」のように行為を表す動詞を逆行態で使用することも可能である。また、「太郎が (私に対して) 仕事を断ってきた」のように行為動詞の逆行構文でも *extra-thematic* な主語が可能である。これらの観察から、二つの構文は動詞の意味によってのみ決まるのではなく、構文のさらなる特徴を明らかにすべきことが示された。

第3章では、逆行構文と受動構文の相違について論じた。まず両構文における動作者の話題性に違いが見られる。逆行構文の動作者は、受動構文の場合よりも話題性が高い。この語用論的な違いは、前者では動作者が能動構文の動作主と同様、主語の役割を保持するのに対し、後者では斜格項に降格されていることに近する。続いて意味的な違いに目を向

け、以下の3点から逆行構文が因果連鎖の起点、行為局面を焦点化するのに対し、受動構文は因果連鎖の終結点、結果局面を焦点化することを論証した。(i) 接触動詞の下位クラスでは、結果含意性のキャンセルが逆行構文では可能だが、受動構文では不可能な場合がある、(ii) 逆行構文では行為が焦点化されるため、動作者は意図的行為者に限られるが、受動構文では結果状態が焦点化されるため、このような制約は見られない、(iii) 状態変化を表す達成動詞は意味的に逆行構文との適合性が低い。本章では、「くる」の意味拡張について、「話者は直示的中心に静止し、自らを取り巻く直示の領域に出現するもの・事態を知覚する主体である」という基本スキーマを想定し、話者の直示領域に出現するのが自律移動、非意図的な状態変化、そして外的に引き起こされた他動的行為であるときに、それぞれの用法が分岐するというモデルを提示した。

第4章では、「てくれる」を含む受益構文について論じた。この構文は人称の階層の下位の参与者から上位の参与者に移動・行為が行われる際に用いられるので、「てくる」と同様、逆行構文の下位類とみなすことが可能である。しかしこれら二つの構文間には相違があり、語用論的に「てくる」は中立／受害逆行形、「てくれる」は受益逆行形と特徴づけられる。さらに、「てくる」による逆行構文は、移動の着点 (R) または被動者 (P) が一人称である時に用いられ、移動物 (T) が人称の階層の上位であってもこの構文は使われないが、「てくれる」構文は R, P, T どれが階層の上位でも使用可能である。これより、「てくる」逆行構文においては、P と R が一つの統語カテゴリーをなすという分析が支持され、これは直接目的語 (P+T) - 間接目的語 (R) という区分とは異なる、一次目的語 (P+R) - 二次目的語 (T) という類型論的区分が日本語において局所的にはたらいっていることを意味する。このような指摘はこれまで類型論的研究においてなされておらず、今後の研究に大きな示唆をもちうる。

第5章では、「てくる」を含む逆行構文の項共有パターンについて論じた。動詞連続においては主語一致、主語変更、動詞主語の3通りが主要なパターンであるとされているが、これまでの章で論じてきた例を統一的に扱うには「てくる」を含む逆行構文の項共有パターンは動詞主語パターンであるとする分析が最も妥当であることを示した。

第6章では、日本語に見られる話者の方向への移動を表す要素「くる」から逆行態標識への拡張（文法化）が、日本語における特殊な現象ではなく、地理的にも類型論的にも異なる多くの言語において観察されることを、東南アジア、北アメリカ、オセアニア諸語の例を挙げて示した。

第7章では、これまでの考察を整理した上で、「へてくる」逆行構文から見た日本語のヴォイス体系の特徴を、より典型的な逆行構文をもつ言語との比較を通じて特定し、残された問題について論じた。

本論文の学術的意義については、以下の審査結果が得られた。

第一に、日本語における逆行構文と受動構文、および受益構文の機能領域について従来の研究の問題を指摘・克服し、それらの使用条件を明らかにすることによってこの分野の研究に対して大きな前進をなしとげた。第二に、直示動詞による逆行構文を類型論的視野の中に位置づけ、文法化のメカニズム、とりわけそこに介在する主観性の現れについて掘り下げた研究を行った。ここで得られた洞察は、ヴォイス体系の類型への新たな可能性を開くものである。

以上、本論文は新たな観点から日本語における参加者のコード化について従来なされなかった貴重な観察、分析、理論化を提示した。学術的価値がきわめて高く、この分野における優れた研究成果として高く評価すべきものと判定する。よって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。